エロデレ2
完璧お嬢さまがときめく時
立ち読み版
小説 筆祭競介
挿絵 浅沼克明

序　章　いきなり二度目のプロポーズ!?　006
第一章　完璧お嬢さまはHなことまでパーフェクト♥　010
第二章　初体験と宣戦布告　063
第三章　お嬢さまふたりのご奉仕対決！　111
第四章　完璧お嬢さまがときめく時　161
第五章　雅とあかり――ふたり一緒に最終決戦　213
終　章　そして新たな学園生活へ　251

登場人物紹介

Characters

七海旗あかり（ななみばた）

有名商社の社長令嬢。拓弥と政略結婚をしようとエロく誘惑してきたが、今では拓弥に惚れてデレデレになっている。

星乃宮 雅（ほしのみや みやび）

名家である星乃宮家のお嬢さま。拓弥の身体に流れる血を狙い、「淑女の嗜み」として教わった閨の技術であかり以上に積極的に誘惑してくる。

悠木拓弥（ゆうきたくや）

ごくごく平凡な男子学生。あかりと婚約している。

そのまま彼女は水泳施設に向かっていき、隣にある女子更衣室の中を覗き出した。
男子の自分まで一緒に中を見るわけにもいかず、慌ててそっぽを向いたのだが、
「中には誰もいませんわ」
雅はそう呟くといきなりこちらの制服を掴み、中にグイッと引きいれてきた。
「おわわっ⁉」
勢い余った少年は大きくバランスを崩し、更衣室の中央に置かれた細長いベンチに尻もちをついてしまう。
「ち、ちょっ、星乃宮さん。いきなり何を……」
驚いてる拓弥をよそに、雅は後ろ手に出入り口のカギをカチャンとかける。
「悠木さんはわたくしのこと――どう思います？」
「……ふえっ？」
どう思うも何も、まだ知りあって間もなさすぎる。
拓弥が答えに窮していると、金髪の美少女がゆっくりと近づいてきた。
今、自分はベンチに座る格好をしているのだが、彼女はその正面からこちらに乗ってこようとする。
「ち、ちょっ――ほわわっ⁉」
拓弥はそのまま後ろに仰け反り、ベンチで横になる格好になった。

唖然と見上げるのは、頬をほんのりと桜色に染めたノーブルな美貌。
その気品と可愛らしさの同居した美しさに、若い男心が根こそぎ吸い込まれそうになり、少年は慌てて口を開いた。
「な、何する気なのか知らないけど、ぼ、僕には、そ、その。将来を誓った人が……」
「あかりさんのことですわね」
「……え⁉　や、やっぱり……知ってたの？」
「今日の二人の様子を見ていれば、だいたいの察しはつきますわ」
「あう～。……って、ならなおさらコレはダメでしょ――ってわわ⁉　だからそんなに近づかないで！」
と拓弥がいくら言っても、雅の接近は止まらない。
今ではベンチの上で四つん這いになり、さらにこちらに近づいてくる。
なんだろう、この現実ではありえないはずなのに――強烈な既視感は……。
（つい最近……こんなことがあったような……）
記憶に強烈に焼きついているあかりとの馴れ初めにそっくりだ。
（そ、そうだ……あの時は確か、先輩がこの後いきなり僕にプロポーズしてきて……）
すると目の前のお嬢さまが、うっとりと瞳を細めて「悠木さん」と呟いた。
「貴方に、わたくしのお婿さんになって頂きたいんですの♥」

※

「んっ……んんんっ！」
女子更衣室のベンチの上で横になり、上から雅にキスされて拓弥は目を白黒させていた。
「っふぁ♥」
唇が離れ相手の美貌がゆっくりと遠ざかっていっても、驚きで全く動けない。
そんな腰抜け状態の少年に対し、金髪のお嬢さまは頬をほんのりと桜色に染めたまま、さらにとんでもないことを言ってくる。
「わたくし、貴方の赤ちゃんを孕みたいんですの♥」
あかりの時よりも、セリフがさらに過激だった。
ましてや雅は『完璧お嬢さま』とあだ名されるほど、普段はお淑やかで上品な女の子。
そんな相手が今にも舌舐めずりせんばかりの、肉食系な表情で自分を見下ろしている。
そのギャップの大きさが凄まじすぎて、
「はひ？　は、はは……」
キスからプロポーズ、そして子造り志願のトリプルコンボも加わり、拓弥は完全に思考が停止してしまった。
「貴方は別に難しいことを考える必要はありませんわ。
今はまだあかりさんに気持ちが残っているのも、それはそれで結構ですの。

ただ今から僅かな間だけ、わたくしの『女』を味わって頂ければそれで充分ですわ」と上品な美貌に妖艶な笑みを浮かべたまま、白い手をこちらの胸にソッと置いてくる。

「ふひゃ⁉」

改めて彼女に触れられて、魂の抜けていた身体に自我が戻った。

（な、なななな、ダメだよこんなの！）

拓弥はすぐに断りの言葉を言いかけて――ツン、とその唇を彼女の指先に押さえられる。

「乙女が恥を忍んでここまでお願いしているんでしてよ。そんな相手に、これ以上恥を掻かせる気ですの？」

大人の担任教師すら一瞬で籠絡した、ウルウルな瞳の上目使いが少年の網膜を貫き、いきなり心臓にまで突き刺さる。

雅のような女の子にこんなお願いの仕方をされて、きっぱりと断れる男がいるだろうか。

「繰り返しになりますが、心配しなくともあかりさんに今回のことを言ったりなんかいたしませんわ。無論、隠し撮りも何もしておりません。

貴方はただ、今からほんのひと時、星乃宮雅の奉仕を一方的に受け、楽しんで頂くだけでいいんですの」

男にとって都合のよすぎるこの提案に、拓弥は不覚にも僅かに動揺してしまった。

その隙を雅ほど聡明な牝獣が見逃すはずがない。

男の抵抗心を蕩かしていたウルウルな瞳が、ニィッと糸のように細くなる。
「うふふふっ♥　それでは始めさせて頂きますわ♥」
返事を躊躇しているこちらの態度を、強引に合意を取りつけたと解釈し、
「わっ、ちょっと⁉　わわわっ⁉」
なし崩し的にお嬢さまの手が股間に伸びてきて、制服ズボンのファスナーを手早く引き下されてしまう。
中からはテント状に盛り上がったトランクスが現れた。
顔も、体格も、そして匂いも、婚約者と全く違う新しい『女』に、拓弥の『男』が強烈に反応してしまっている。
「身体の方が正直ですわね♥　こちらは全く嫌がっていませんわ♥」
と雅は拓弥の耳元で甘く囁き、チュッと頬にキスをしてから、さらにその指を使ってトランクスの前を掻き分けてくる。
相変わらず自分のペニスは、充血しても片手で全てが握り込める程度のサイズ。
真っ赤になった亀頭は、かろうじて肉傘部分が包皮にひっかかっているが、今すぐにでも中から外へ弾き出そうだ。
その漲るペニスを掴んだのは、細くて柔らかな乙女の白指。
熱く漲る肉棒へ、少しひんやりした感触が、じわっ、と染み込んでくる。

「ああっ、い、いきなりそんな……ふあぁ!?」
股間を掴まれ、反射的に相手の顔に視線を向けて――そして目を丸くする。
「はあん♥　こんなに硬くして頂けて、とても光栄ですわ♥」
うっとりとこちらを見詰めてくるアメジスト色の瞳が想像以上に熱っぽい。
あかりが言っていたように、自分に一目惚れしたのかも、と錯覚しそうになる。が。
「これが鳳の血の熱さですのね♥」
彼女は拓弥自身にではなく、この身体に流れている『血』にメロメロのご様子だ。
そして今の拓弥は、なぜ、彼女がそんなことまで知っているのか追及する余裕がない。
「そ、そんな……だめっ、そこを、そんなにサワサワしちゃ――くひやあぁぁ!?」
雅が竿肌に柔らかな掌を吸いつかせて、五本の指で肉棒の形をなぞるように扱いてくる。
その手つきは明らかに手慣れていた。
あのあかりに初めてされた時よりも、上手い気がするほどだ。
「これが拓弥さまですのね♥」
(た、たたた拓弥さま!?　今、僕のことさま付けで呼んだ!?)
と驚いている間もなく――。
「はうッッ!?」
一定のリズムで男根をさすっていた彼女の右手が、包皮を強めに一撫でし――ピチン。

あっさり拓弥をズル剥けさせる。
甘ったるい香りの残る女子更衣室に、密閉されていた若い牡臭さがプンと漂う。
「ああン♥　これが男の方の匂いなんですわね♥」
「わわ⁉　星乃宮さん、そんなところでクンクンしないでぇ！」
「あら。二人っきりの時はわたくしのことを遠慮なく、雅、とお呼びください♥」
「え、えっと、それは――んふぁぁ！」
拓弥は最も敏感な部分が外気に触れて、ヒヤッとする感覚と共に相手の肩を掴んでいた。
雅はこちらの切羽詰まった反応に瞳を細め、自分の肩を掴んでいる拓弥の手の甲にチュッとキスを返してくる。
少年が驚いてビクと手を浮かせると、相手は続けてその指先をねっとりと舐めてきた。
「この指でわたくしの身体をお好きなように、弄んで頂きたいですわ♥」
唾液に濡れる桃色の肉片がヘロヘロと卑猥に宙を舞い、上目使いでこちらを見詰めながら、爪先から指の腹にかけてを這っていく。
指先で感じる愉悦は僅かだが、セリフの内容とその視覚的なエロチックさは桁外れ。
お嬢さまが物欲しそうにこちらの指先を舐めてくるその姿に、剥けたばかりの男根がさらに熱く漲ってしまう。
ペニスを愛撫する手つきといい、男の視覚を意識したこのテクニックといい、今日一日

クラスで見せたお淑やかなお嬢さま振りとは正反対の淫らさだ。
拓弥はただただ両目と口を丸くポカンとさせるばかり。
すると、うっとりした表情で奉仕行為に耽溺していた雅と視線があい――彼女はハッと我に返った表情を浮かべた。
「……勘違いしないで頂きたいですわ」
金髪のお嬢さまは一転して恥ずかしそうに瞳を伏せる。
「え～と。……な、何がその、勘違いなの？」
「こんな淫らなことを殿方相手にしているのは、今が初めてですの」
どうやら自分の驚いた表情から、こちらの気持ちを察したようだ。
「先ほど拓弥さまとしたのがわたくしのファーストキスですし――つまり、わたくしとこんなをする男性は、この世で貴方だけでしてよ」
このセリフ、前に一度聞いた気がする。
「……雅さんも歳の離れたお姉さんが沢山いるとか？」
「は？　突然、何を言い出しますの？」
金髪のお嬢さまは頬を赤らめた顔のまま、不思議そうに小首を傾げた。
「いや、その……こーいうこと……どうやって覚えたのかな、と思って」
「うふふふっ♥　我が星乃宮家は由緒ある家柄。その子女として、将来夫となるべき方を

悦ばせるために、淑女の嗜みと教えられてきた閨(ねや)の技ですわ♥」

すると彼女は拓弥の上に覆いかぶさったまま、自分の胸元のボタンを外し出した。

「わわわわっ！　な、何いきなり、脱ぎ、わっ⁉　だめ、見えちゃうって！」

服の下から現れたのは、フロントホックのブラに包まれた特大バスト。

シルク製の生地に包まれた、シルクに負けないほどきめ細かな二つの豊かな丸みだ。

その深い胸の谷間に嫌でも視線が吸い寄せられる。

「どうですわたくしのこのおっぱい♥　フワフワプリプリしていて、見た目も揉み心地も、あのあかりさんに負けていませんわよ♥」

純粋な大きさの比較ならば、長身な上級生の方が優っている気がする。

しかし雅の方が体格が小さい分、むしろ見た目は大きく見えた。

そして揉み心地は――想像するしかない。が、彼女の肌はまるでミルクを溶かしたような濃密な白色で、触らずともその瑞々しさは想像できる。

「うふふっ。ニラんだ通り、拓弥さまはおっぱい好きのようですわね♥　授業中や先ほどまで並んで歩いていた間も、胸元に熱い視線を感じていましたわ♥」

「いや、それは……」

こんなに綺麗な女の子が、こんなに大きな胸を隣でタプタプさせていれば、男なら全く視線を向けないわけにはいかないだろう。

ほんのりと頬を赤らめた恋人が、ふーっ、とその腋の下に息を吹きかけた。
雅の太股をねちっこく楽しんでいた少年の動きがビクッと止まる。
「え、えーと、つまり、それって……」
「うん♥　拓弥クンのおちんちんを、腋の下でズリズリするって意味♥」
恋人のセリフを聞いた直後、雅の太股に挟まれたペニスがビギッとその硬度を増した。
かなり特殊な行為だろうけど、それはそれで興味がある。
「……し、仕方ありませんわね」
それを察したお嬢さまは、自ら両足を開き拓弥の男根を解放した。
少年は赤毛の上級生に誘われるまま立ち上がり、彼女のもとに歩み寄る。
その間、視線はずっとツルンとした白い腋の下に釘付けだ。
「いいよ♥　そのままココに来て♥」
拓弥は誘われるまま、ローションでドロドロなままの男根をそこに差し向けた。
先端が触れると「あン♥」とあかりが敏感に甘い声を漏らす。
腋の下には腕や胸の筋肉の根元が集まり、複雑な構造の窪みができている。
それでいて窪みの底はふにっと柔らかく、剛直したペニスを心地よく受け止めてくれた。
（これ、なんだかとってもジャストフィット～♥）
その密着具合は、先ほどの土踏まず以上。

ペニスの裏で感じる、小さな筋肉群の感触がたまらない。
船底のような形の肉皿に、男根がカチッと嵌まり込んでいる。
拓弥は両脚をガニ股状態にして、腰を振るというよりは上下させてズリズリと擦りつけ始めた。
ただこちらの動きが加速していくにつれ、ベッドの上の二人はギシギシと揺れる。
そのため、密着感がどうしても薄れてしまう。そのため――。
「ああん♥　拓弥クンってば積極的ぃ♥」
少年は両手で相手の腕を抱え、二人の間が離れないようにして行為を続けた。
猛りきったペニスで感じる、腋の下の弾力に溢れた感触がたまらない。
（気持ちいいよぉ～。先輩のココ、僕のためにこうなったみたいな形してるしぃ）
ただ、これが足や太股以上に、マニアックな行為だという自覚もある。
それでも腰の動きが止まらなかった。
このままココでイッてしまってもかまわない。
拓弥がそう思い、腰の動きをさらに加速しようとした時だ。
「前座はここまでですわ。やはり女の勝負をつけるなら――」
いつのまにか上着の前をはだけた雅が見せつけるようにブラを外し、
「ココで勝負ですわ」

ベッドの上で膝立ちの姿勢になると、バンと胸を張ってきた。
彼女の前で挑発的に揺れるのは、細身の体格に見合わないたわわに実った二つのバスト。
「おっぱいで決着をつけるってわけね」
無論、胸の勝負であかりが気後れするはずもない。
彼女は自ら脇ズリプレイを中断すると、
「望むところだよ」
膝で歩いて雅の正面に移動し、手ブラで隠していた胸をやはりバンと前に突き出す。
「……あ、あの～」
二人は拓弥そっちのけで睨みあうと、お互いの胸が触れあいそうなほど近づきあった。
「やっぱり、私の方が雅ちゃんより大きいみたいだね」
体格に優るあかりが文字通りさらに大きく胸を張る。
「でもわたくしの方が肌がピチピチしていて、もっと大きくなる将来性がありますわ」
若い雅も負けていない。
二人は言葉の応酬だけではなく、視線でもバチバチと火花を散らし出す。
「やはりココも、どちらがいいかは拓弥さまに決めて頂かないと」
「だよね」
二人は睨みあったまま、お互いにローションを掌にたっぷりと乗せ、

――ぬるるるン♥　ぷるん♥　ぬるぶるるン♥

同時にそのローションを、自らの乳房に塗り込め始めた。

ただでさえ魅惑的な乙女の膨らみが、透明粘液によって濡れ光り、たまらなく卑猥な艶を放ち始める。二人の細い指の狭間から、摩擦係数の極端に減った柔肉が、ぬるるん、プルン、と溢れ出る光景がたまらない。

加えて、たっぷりと濡れた球面にはそれに見合った光沢が走り、触らずともその豊かすぎる立体感を実感できる。

「うわぁ～」

拓弥はその魅惑的すぎる四つの膨らみに吸い寄せられるように、二人のもとまで近づいていた。すると、すでにギンギンに勃起しているペニスに向かい、二人の巨乳お嬢さまが我先にと膝で歩いて襲いかかってくる。

「拓弥クンを挟むのは私のおっぱいだもん！」

「いいえ、わたくしのおっぱいですわ！」

この勝負に関しては、先を譲る気はないようだ。

二人とも、すでに拓弥が限界近いと悟っているのだろう。

先に挟まれてしまっては、自分の番まで持たないと読んでいるのかもしれない。

胸を再び張りあうようにして、お互いの豊かな膨らみをブルンタプンと潰しあう。

（これは、これで……凄い眺めかも）

そうして拓弥の目の前に現れたのは、卑猥極まりない柔肉の谷間。

厚みのある二種類の丸みが真正面から互いを潰しあうことにより、一個人の胸の谷間では実現できない、魅惑の境界線を生み出している。

弾力も張りもサイズも拮抗している美巨乳だからこそ、片方が一方的に圧倒することなく、それでいてむにゅんタプンと互いの丸みを歪めあい、脇に溢れた柔肉によって、さらにボリューム感が増す。

しかも拓弥はその光景を横から見ているだけに、豊満な牝肉の下に見える、うっすらと肋骨の筋が見えるほどシャープなウエストも目に入る。

ただバストが大きいだけではなく、この腰のくびれとのギャップこそが、牡を強制的に発情させる大きなポイントだ。

（こ、この……凄すぎる二人のおっぱいの間で……）

足ズリ、太股ズリ、脇ズリ――と、かなり特殊な責めを連発されてきた流れもあり、拓弥の意識も大胆になっていた。先ほどの脇ズリで、もうイッてもいいと思ったほど、欲情に昂っていた部分も大きい。

ごっくん、と大きく生唾を飲み込んでから、争いあう二人の脇から腰を入れて、

――ずにゅるるるン♥

二つ重なる乳房の狭間に、己の股間を突き入れた。
「っくうぅぅぅ!?」
その直後、ペニスを左右から圧迫する感触の違う二つの弾力に、拓弥は奥歯を強く噛みしめる。
（す、凄い……コレ、凄すぎるぅ……）
なんなんだ。この桁外れに柔らかで、ボリューム感のある圧迫感は。
豊かな乳房を二つ並べて、最も肉厚な部分に埋めたため、肉棒を自由に動かせるほどの柔らかさに埋もれながらも、がっちりと挟み込まれている。
まるで蕩けるようなこの柔肉の感触は、味覚で例えれば高級和牛の霜降りサーロイン。マグロで例えればまさに大トロ。
二人がお嬢さまだからではないが、贅沢極まりない挟み心地だ。
「ほわわっ？」「た、拓弥さま？」
この大胆なこちらの行動に、それまで諍っていたお嬢さま二人が一瞬キョトンとする。
あくまで責めるのは自分たちで、拓弥の方からこれほど積極的な行動を取るとは思っていなかったのだろう。
拓弥はやや不安定なベッドの上で立ったまま、自分の姿勢を支えるために、二人の肩をそれぞれギュっと掴んでいた。

すでにもう最初の一挟みでイキそうだったという事情もある。
「なるほど。ケンカせずに二人で俺に奉仕しろ、ということですわね♥　さすが王者の血筋ですわ♥」
「一人ずつ挟むより、一緒に挟んだ方が、どっちがいいかわかりやすいしね♥」
二人はそれぞれこちらの行動を、都合よく解釈したようだ。
拓弥が突き入れているのとは逆側の腕で、お互いのくびれた腰を抱き、さらに胸の密着をムニュンと深めてくる。
「ッッッうっ！　スゴっ、これ、すごッッ！」
二つの異なる乳肉に竿肌の左右全面をぴっちりと押し挟まれて、愉悦の声が止まらない。
そして、確かにこうして同時に挟まれると、どちらも最高レベルだと思える美巨乳の違いがわかる。
一回り大きな上級生の方が僅かに柔らかく、若い同級生の方が弾力に優っていた。
その違いが一人だけでするパイズリとは違う、複雑な肉悦を生み出している。拮抗しようとする二種類の丸みは常に波打ち、うねり、その狭間が休みなく動き続けていた。
（凄いよ、これ……。おちんちんが両側から二人のおっぱいにギュッってされて、中がヌルヌルのタプタプでッッ）
中にたっぷり詰まった乳肉が、密着し続けているというのに、常にねっちりと絡みつい

てくるようだ。
拓弥は下半身を突き出す格好のまま、上半身を激しく身悶えさせた。
股間から猛烈な勢いで込み上げてくる限界のシグナルが脳裏で白く瞬き、とてもジッとはしていられない。
「ああっ！　ああっ、あぁあああぁぁ！」
意味のある言葉を口にする余裕もなく、露骨に裏返った声でただただ官能を叫ぶのみ。
あかりと雅も、今まで以上の手応えを感じたのか、さらに自慢の胸を自ら揺さぶり、拓弥を責め立ててくる。
無論、それはこちらの反応を窺いながらなため――。
「雅ちゃん、今度はもっと、こんな感じで♥」
「そうですわね。それでは♥」
必然的に、二人は協力して乳奉仕を行うことになる。
――ニュルン、だぷだぷ♥　くちゅ♥　ニュル、だぷぷぷン！
下から迫り上がってくる雅の弾力乳と、上からのしかかってくるあかりの柔らか乳。
その狭間で揉みくちゃにされる拓弥のペニスは、強烈な肉悦の渦に巻き込まれ続ける。
あかりの天才的な勘のよさと、雅の大人顔負けの聡明さによって、ダブルパイズリが生み出す快感量が加速度的に増大していく。

「ああ、も、もうイクっ！　イッちゃうよぉおぉ！」
立て続けに変則的な責められ方をされた肉悦の蓄積もあり、拓弥は瞬く間に限界を叫んでいた。
そして、これまで挟まれっぱなしだった少年の腰が、カクカクと二人の肉の狭間に向けて突進する。肉先が抵抗感の違う柔肉の狭間を突き進んでいると、同じように硬い二つの突起に突き当たった。
二人の乳首だ。
柔肉の海の中に見つけたそのシコリを、拓弥は己の肉先で本能的に突きまくる。
「ああン♥　拓弥クンのすごいよぉ♥」
「そんなにされたら、わたくしも胸だけでイッてしまいますわぁ♥」
二人は恍惚した表情でこちらを見上げてきた。
互いの腰に回した腕に力を込めて、さらに互いを引きつけあって。
そのため肉棒の周りでは、豊潤な愉悦がさらに密度を増して弾け続ける。
「はくあぁ！　そんなにギュッとされたら――ああっ、あああぁぁぁあぁ！」
密着していた四つの丸い膨らみがさらにお互いを押し潰し、胸の谷間を深くする。
竿肌に浮く血管が押し潰されそうなほど、中のペニスが圧迫され、
「イッちゃうよっ！　もうイクからね！　あぁぁぁイクうぅぅぅぅぅ！」

ただ特大な柔肉の盛り上がりである二つのバストは、こちらからの衝撃を正確に受けて、
（僕の腰とおんなじように、右回りでおっぱいがボインボインしちゃってるぅ～）
これも小柄な身体に似つかわしくない、巨乳ならではの光景だろう。
牡の獣欲を根っこの部分から刺激してくる光景に、拓弥はたまらずその柔肉を片手で強く握り締めていた。
「そんなに胸をギュッとされてしまうと……っっくうっ、ンっ――んはぁッッ……」
しかも相手の喘ぎ声の質が、初体験の時とかなり違う。
あの時は、グアムの解放的な海と空の真っただ中で、想いのまま喘いでいた。
対して今は喘ぎ声を出すのが恥ずかしいのか、必死に堪えようとしている。
僅かに声をくぐもらせ、どうしても溢れ出てしまう官能の声に頬を赤らめ、ますます恥じらっているようだ。
（そんなに可愛く下唇を噛みながら、んふんふ、喘がれちゃうとぉ～）
拓弥は腰と手を動かしたまま、超至近距離から雅の顔に見惚れ続けてしまう。
「何なんですの、そんなにジロジロわたくしの顔ばかり見て……あっ!? ま、まさか……
く、くちづけをしたいんですの？　わたくしの身体だけではなく、唇まで貪り尽くしたいんですのね」
桜色に濡れる唇は、自らが紡ぐ否定的な言葉とは裏腹に、キスをねだるように半開きに

なって甘くハアハアと喘いでいた。
拓弥はもういても立ってもいられなくなり、襲いかかるように彼女に唇を重ねてしまう。
しかしキスした直後に舌を入れてきたのは、今夜何度も「勘違いするな」と念を押してきたお嬢さまの方が先。
――レロ、くちュ、れろれろレロ！　ンチゅっレロレロッ！
自分に対して見下しセリフを連発していた高飛車舌が、まるで縋りつくようなねちっこさでヌルヌルと絡みついてくる。
「ん♥　んチュんっ♥　んっ、チュんんんっ♥♥♥」
しかもその間、彼女の漏らす鼻息の甘さが尋常ではない。
キスをすることにより、憎まれ口を叩かなくて済むようになったため、本心からの行動に没頭できているのだろうか。
拓弥もレロレロと舌の動きを相手に合わせながら、ねちっこく腰をくねらせて彼女との交わりをより深めていく。
「こ、今夜の雅さん……なんだかとっても魅力的だよぉ」
「な、何を突然……言い出すんですの」
散々「わたくしみたいなお嬢さまが――」と上から口調だったくせに、いざ素直に褒めてみると、目に見えて動揺している。半開きになった唇をアワアワと波立たせ、アメジス

ト色の瞳を忙しなくキョロキョロさせて。
それでいて彼女の口元にこちらの唇を尖らせて近づけると、
「い、今していることは――ンチュ♥　あ、あくまで家を救って頂いた礼ですわ。ヘンな勘違いをして――チュッん♥　頂いては心外ですわ――レロんんんっ♥」
見下しセリフとは裏腹に、甘くチュッチュッとキスをしてくるのだからたまらない。
舌を出せば「心外ですわ」と言っていた舌が自ら絡みつき、拓弥がゆっくりと顔を離すと、彼女の顔にははっきりと「もっとチュッチュッしていたいですわ……」と書かれているように見える。
（なんなんだよぉ……この反則的なエロ可愛らしさはぁ♥）
胸の奥が、予想を裏切り続ける彼女の言動にドキドキしっぱなしだ。
そして、いくら鈍感な拓弥でも、彼女がデレモードに入っていることが確信できる。
しかしそれは、あかりの時の檄甘うぶうぶタイプとは正反対。
ツンな言動なのに態度がデレな、世に言う『ツンデレ』モードだ。
それなのに――赤毛の恋人の時と同じように男心が掻き立てられる。
しかも、そんな相手だからこそ、少年の胸に意地悪心が芽生えてしまう。
「ねえ、雅さん……僕のこと、好きって言って」
「な、何を、何を突然……」

「別に突然なんかじゃないよ。この前までは、ずっと僕のこと好きって言ってくれてたよね？　それとも本当に僕のこと好きでもなんでもなくなっちゃったの？」

雅は眉を八の字にして「そ、それは……」と口元を握り拳で覆い、潤んだ瞳でこちらを見詰めてきた。

そんな顔を真っ赤にして口籠ってしまった相手に、言葉を促す意味で――ズン！

腰を強く突き入れる。

「ああン！」

「好きって言ってくれないと……もう、キスできないよぉ。だって自分のこと好きでもない女の子と、僕、キスはできないもん」

雅の度を超えたツンデレ振りに酔っ払い、自分がムチャクチャなことを言っている自覚はかろうじてある。何しろキスどころか、今もセックスをしているのだから。

「ああん……そ、そんなぁ……」

しかし、いつもあれほど聡明な雅が、その点を全く指摘してこない。

心底、迷った表情をしたままこちらの動きに合わせて、アンアンと甘く喘ぐのみ。

しかもその間、彼女の身体は敏感にビクッビクッと小刻みに震え続けている。

その性的感度は明らかに今まで以上。

間違いなく意地悪なセリフが効いている。

（ひょっとして……雅さんってM体質!?）
これではますます、ツンデレお嬢さまを追い詰めたくなってしまうではないか。
拓弥は尋常ではないほど鼻息を荒くしながら口を開いた。
「み、みみ雅さんって、アソコの一番奥にある、この部分をおちんちんの先っちょでコツコツされると、凄く感じちゃうみたいだよね――ほら♥」
「あンっ!? そんなに、同じところだけを続けて――んはあぁぁぁぁぁ！」
「雅さんのココをこーしてツンツンしながら、僕さっきみたいなベロチューしたい」
「ッッ～～っっ!?」
完璧お嬢さまの困った顔が、可愛く見えて仕方がない。
少年はますます鼻息が荒くなり、視界が興奮でけぶっていく。
「い、今から言うことは……め、命令されて仕方なく言うのであって、あぁァん！　わ、わたくしの本意ではありませんからね」
雅が激しく息を乱しながら、それでもなお言い訳がましいことを言ってくる。
しかし、それは今のツンデレお嬢さまにとって、どうしても必要な建前なのだろう。
「わかってるよ。演技でかまわないから、ね。お願い」
拓弥もすぐに調子を合わせた。
そして彼女のセリフをじっくり聞くために、腰の動きを一旦止める。

お嬢さまは官能の潤みで蕩けきった瞳をこちらに向け、たっぷりと躊躇した後に、
「……す、好きですわ」
小さな声で呟いた。
直後、雅自身が己の口にした言葉に反応してか、ビクンと鋭く女体を震わせる。
「はくうぅぅ〜」
思わず拓弥の口から、愉悦の声が漏れた。
相変わらず雅の中は、大きさも締めつけも具合がいい。
自分のサイズに合わせたように、しっくりと嵌まりあっている。
それがキュウゥゥっと膣襞たちが竿肌に深く食い込むほどきつく収縮したためだ。
しかも、今の一言で雅は再び軽く達したのか、薄く浮いた腹筋が筋張るほどビクビクと女体が痙攣し始めている。
このあまりに官能的なお嬢さまの反応に、拓弥の理性は吹き飛んでいた。
「も、もっと言って！　もっと、もっと好きって言って！」
もっともっと雅の恥じらい乱れる姿が見たくって、好きのセリフを強要する。
対してツンデレお嬢さまの理性の箍も、今のでどこかに吹き飛んでしまったらしい。
「ああん！　好きですわ！　拓弥さまのこと、この世で一番大好きですわあぁぁ！」
これは命令、という免罪符を手に入れたこともあり、『好き』という言葉を続けざまに

連呼してくる。
そのたびに、彼女の中で性に沸き立つ肉体と、ツンデレな精神が激しくスパークしているのか、拓弥と繋がるヴァギナのくねりがさらに増す。
膣の内側をぴっしり埋めるヒダヒダたちが、内側に向かって捲り返るように蠕動し、中のペニスから無理矢理大量の肉悦を絞り出していく。
「雅さん！　雅さあぁぁん――んちゅ、んんん♥♥♥」
たまらず拓弥の方からキスをしていた。
しかし唇の間から、物凄い勢いで舌を割り入れてきたのは、今回も雅の方が先。
「んはあぁっ！　しゅきいぃ♥　拓弥さまろころ、らいすきいいいぃぃ♥」
夢中でこちらの味覚器官に絡みつき、口腔粘膜から歯茎に至るまでところかまわずねぶりまわしてくる。
好き、という言葉を聞くまでもない。
このディープキスの濃密さこそが、何より『貴方が、大好きです』と叫んでいた。
そんな相手の艶姿に、少年の背筋は脊髄の芯からゾクゾクと震えっぱなしだ。
（なんでなの！　なんでこんなに雅さんのことを――）
心の底から愛しく感じてしまうのか。
今でも、間違いなくあかりのことを愛してる。

なのに、雅にまで――他の女の子にまで同じ気持ちを抱いてしまっていた。
その燃えるような感情の昂りは、容易く若い肉体を支配して腰の動きを加速させる。
――グジュ、くちゅ、ずじゅん、ずじゅずぱぱぱン！
ただでさえ、相性のいい性器同士の交わりをガムシャラに行えば、瞬く間に限界まで追い詰められるのは必然だった。
（ヤ、ヤバッッ!?　僕ももうイッちゃいそうかも!?）
雅のヴァギナはこれが二度目とは思えないほどなめらかに、拓弥を受け入れている。
ぷにっと柔らかな大陰唇が文字通りペニスを咥えるように絞り上げ、中の襞々一つ一つは、今ではそれぞれが意思のある舌のように、中のペニスをむしゃぶり舐めている。
そして一番奥にある子宮の入り口を肉先でコツコツするたびに、ビクンビクンと拓弥と絡めている本物の舌の動きが止まる。
試しに腰を深く入れたまま、尻を引き締めて小刻みに突き出すように、連続してコツコツしていみたら――。
「んはぁ♥　そ、そこばかりを続けてツンツンしちゃらめええぇ！」
雅の喘ぎ声が甘く甲高く、糸を引くように絞り出された。
いまだにパジャマを羽織ったままの上半身が弓反りになり、深く嵌めあわせていたキスが解けて、細い顎が限界まで反り返る。

真上に突き出された豊かな乳房がこちらの薄い胸でムニュンと潰れ、少年の背中を掴んでいた彼女の両手は、今はバンザイの格好でベッドのシーツをきつく握り締めていた。

つい先ほどイッたばかりだと言うのに、その姿は再びエクスタシー直前。

そして彼女と同じように理性を性欲で吹き飛ばしている少年は、雅に耐える暇を与えなかった。

濃密なディープキスを味わっていた口が突然寂しくなり、目の前で震えている白い喉に本能的にむしゃぶりつく。んふんふ、と荒い鼻息を漏らしつつ、小刻みな腰突きはそのままに、口と性器で弓反るお嬢さまを責めまくる。

「ああ、ら、らめっ、また、イッてしまいますわ！　ああ、そんなに続けて……っああ、んはあああああぁぁぁぁ！」

甲高い官能の叫びが長くいつまでも糸を引き――ビグビグビグビクッッ！

激しく震えていた喉が堅く筋張り、こちらの胸に密着している豊かな乳房だけが、ぶるるるン、と激しく揺れまくる。

「イ、イクっ！　もうイクっ！　僕もいくううぅ！」

対して拓弥はブリッジしている相手の背中を片手で抱き締め、肉先を彼女の最深部にゴリゴリと捻じ込みながら腰の動きを急加速。

腰の奥では絶頂直前の疼くようなざわめきが、稲妻のようにビリビリと駆け巡っていた。

「ああん！　らめえええぇ！　このままなかにらしちゃらめえええぇ！」
全身を激しくビクつかせる絶頂感の中、ツンデレお嬢さまが呂律の回らない艶声で膣内射精の中止を叫んでくる。
しかし、今の拓弥は完全に暴走モードに突入していた。
「いやだ！　このまま、僕、雅さんの中でいく！　雅さんの中に出す！」
超至近距離で真正面からアメジスト色の瞳を見詰めながら絶叫した。
「だ、だって僕……雅さんのことも、本気で好きになっちゃったみたいなんだもん！」
拓弥はもう、他の動きを忘れた動物のようにガムシャラに腰を突きまくる。
「っっっ～～ッッ！！！」
そんな性的興奮で精神の茹だりきった少年の叫びに、金髪お嬢さまは両目を大きく見開いて、声にならない絶叫をしながら身悶える。
「中に出すよ！　雅さんの中でイクからね！　ああっ、雅さん、雅さんッッ！　――っあぁぁぁぁ！　み、みやびいいいいいぃ！」
拓弥は初めて完璧お嬢さまの名を呼び捨てで叫び、終始ブリッジ状態の女体を下からすくい上げるように腰を突き上げ――動きを止めた。
全身で漲っていた官能の昂りが、一気に股間に収縮し、
――ドギュどりゅどぬぷどりゅッッ！　ドギュどぷどぷドプどぎゅんッッ！

凄まじい勢いで雅の中へとぶちまけていく。
「んはあああぁぁぁ！　わらしのなかれええぇ！　たくやさまがあああぁぁ！　ああっ、ああああぁぁぁぁぁ！」
広いホテルの一室が、雅の叫ぶ絶頂一色に染め抜かれる。
官能の汗でビチャビチャに濡れた小柄な女体は、少年の脈動と完全にシンクロして鋭くビクつき、二人は同じように絶頂を極めあう。
「っっ……っくふあぁぁぁ……」
拓弥は全てを出しきると、息ませていた全身から力が抜けて、そのままドサッとお嬢さまの上に倒れ込んだ。
対して雅もずっと弓反らせていた背筋をベッドに落とし「ああン……」と甘い吐息をやっと吐き出す。そして――。
「みやびぃ……」「た、たくやさまぁ♥」
二人はどちらからともなく唇を重ね、壮絶だった性の余韻を最後まで味わいあう。
なお、この時まで雅の方が先に舌を絡めてきた。
そうして暫く、互いの唇と舌を甘く優しくねぶりあっていると、これまで完全に吹き飛ばしていた理性が徐々に戻ってきた。
拓弥の脳裏に、性に暴走した自分の言動がうっすらと蘇ってくる。そのため――。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ http://ktcom.jp/ 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

http://www.comic-valkyrie.com/

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

http://www.cran-berry.com/

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

http://www.mille-feuille.jp/

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

http://www.2d-dream.jp/

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!